

オグロシギ *Limosa limosa* (Linnaeus)

【選定理由】

春と秋の渡り時期に伊勢湾、三河湾沿岸部の水田や休耕田、干潟や水たまりなどに渡来するが、1980年代半ば以降に個体数が著しく減少し、近年では限られた場所に少数が生息するに過ぎない。加えて、沿岸域の湿地は少なくなっており、絶滅の可能性が増大している。

【形態】

全長 36～44cm。夏羽は、頭部から胸にかけて橙褐色、上面は赤褐色で黒色の軸斑と白斑があり、胸側と脇には黒色の横斑がある。冬羽は、頭部から上面にかけて灰褐色で、下面は白色。幼羽は、上面の羽縁がバフ色で頭部に黄褐色味を帯びる。嘴はまっすぐで長く、脚は黒色で長い。飛翔時は、風切の白い横帯と腰の白色、尾の先端の黒色がよく目立つ。雌の方が雄よりやや大きい。



愛知県豊橋市, 1992年8月20日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

ユーラシア大陸中部、北部で繁殖し、ヨーロッパ南部、アフリカ、インド、東南アジア、オーストラリアで越冬する。日本には、春と秋の渡り時期に渡来する。

県内では、主に春期に伊勢湾、三河湾沿岸の淡水や汽水の湿地、水田などに生息する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

春期は4月中旬から5月下旬頃まで、秋期は8月から10月にかけて、水田、干潟、水たまりなどの湿地に渡来し、数羽から20羽程度の群で生息する。春期の渡来数は、秋期に比べて少ない。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内の主な生息地として、鍋田周辺、矢作川河口周辺、汐川干潟周辺があげられる。1980年代半ばまでは、これらの地区で普通に見られ1975年の秋に鍋田周辺で150羽が数えられたこともあるが、近年は、県内合計で数羽が記録されるに過ぎず、著しい減少傾向にある。沿岸部の広い湿地は消滅し、水田は周期的な転作による乾燥化で餌となる生物が消滅している。

【保全上の留意点】

オグロシギをはじめ淡水系水鳥を保護するためには、生息地の水田の稲作の継続を基本として、水田本来の生態系を保った形の淡水湿地環境を保全し、自然性の回復に努める必要がある。

【特記事項】

シギ・チドリ類の全国調査における愛知県内でカウントされた本種の個体数は1981～1983年の秋期が最大121羽であったが、近年の観察では県内合計で10羽に満たない。

【関連文献】

- 桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.235. 文一総合出版, 東京.
藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之, 1997-1999. シギ・チドリ類全国カウント報告書 vol.1-vol.6. 日本湿地ネットワークシギ・チドリ委員会, 豊橋.
真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.134. 世界文化社, 東京.
吉村信紀ほか, 1974-1998. 野生鳥類生息調査結果報告書(鍋田地区). 愛知県農林部, 名古屋.